印度學佛教學研究第三十八卷第一號　平成元年十二月

サンジャヤ説の tathāgata 考

茨田通俊

Dīgha-nikāya 第二経の『沙門果経 (Sāmaññaphala-sutta)』に見られるサンジャヤ・ヴェーラッティプッタ (Sañjaya Belaṭṭhi-putta) の説の中で、tathāgata の死後の存在の有無が問題とされている。この四句分別によって示された tathāgata の死後存在に関する定型句は、仏陀の十無記の中にも見出だされるなど、パーリ仏典中に散在している。通例 tathāgata は「如来」と訳され、悟った人、証悟者の意に解するが、ブッダゴーサ等の注釈によれば、tathāgata の死後存在に関する定型句については、tathāgata は有情 (satta) もしくは我 (attan) の意味であるとされる。[1] この tathāgata の解釈を巡って既に多くの研究がなされ、近年ではジャイナ教文献からの検証も行われているが、[2] ここでは文脈を整理しながら、今一度考察を加えてみたい。

サンジャヤ説では、tathāgata の死後の存在の他に、他世 (paro loko)、化生の有情 (sattā opapātikā)、善悪業の異熟果 (sukaṭa-dukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko) の存在の有無が問題となっている。このうち化生の有情 (sattā opapātikā) に注視すれば、有情 (satta) という語が現れている。ここで問題視される tathāgata が単なる一般の有情の意味ならば、「化生の」と限定された有情の存在を問題としながら、さらに一般の有情について取り上げるのは不可解である。また、一般の有情を表す用語としては satta で充分なはずである。やはり tathāgata の死後存在の問題において、あえて tathāgata という語を用いたことは、この語は単なる有情を表すのではなく、何か特別な意味合いを示唆するものと考えるのが自然であろう。

ところで、サンジャヤ説で取り扱われている他世の存在等の問題は、当時の思想界にあっては、共通の思索の対象であったと考えられる。『沙門果経』の六師の所説のうちアジタ・ケーサカンバリン (Ajita Kesa-kambalin) の説に、サンジャヤ説にも見られる他世、化生の有情、善悪業の異熟果が取り上げられている。両者が思想的立場を異にしながらも、

共通な思想の対象をもっていたことは明らかであろう。アジタ説に見られる「正しく行じ、正しい智慧を得て、現世と他世を自ら知り、悟って、(他人に)知らしめる沙門婆羅門[3]」は当然証悟者、解脱者を意味すると考えてよいだろうから、証悟者に関する問題もまた、当時の思想界では重要視されていたと考えられる。当然サンジャヤにおいても、証悟者に関連した事柄は、重要な思索の対象であったと推測されよう。サンジャヤ説の中の tathāgata を証悟者の意に解するのは、決して無理なことではない。

ジャイナ教文献にみられる tahāgaya も、一般に証悟者の意味に解されるようだが[4]、その注釈で再生せずに解脱した者と解されるのは[5]、「最後の身体を保つ者 (antimadehadhārin)」(Sutta-nipāta 471) 等の仏典の表現と軌を一にするものとして無視できない。ここでは、最後身を保ち、再生しない者の死後の存在が問われていると考えられる。

tathāgata の死後存在に関する定型句の tathāgata が、証悟者を意味すると考えられる一例として、Saṃyutta-nikāya の第二十二の八十六経において、外道遊行者たちが尊者アヌラーダ (Anurādha) に尋ねる箇所が挙げられる。

かの tathāgata は最上人であり、最勝人であり、最勝の獲得を得ているが、それ (tathāgata) を施設しようとして、tathāgata (ゴータマ・ブッダ) はこれら四つの根拠において施設する (Saṃyutta-nikāya, Vol. III, p. 116)

この直後に tathāgata の死後存在に関する定型句が続くわけである。文脈上死後の存在を問う tathāgata は「最上人であり、最勝人であり、最勝の獲得を得た」という形容がされている以上、明らかに証悟者を意味すると考えられる[6]。この箇所をブッダゴーサは、「汝の師 (アヌラーダの師であるゴータマ・ブッダ) である tathāgata が、有情である tathāgata を (施設する)」(Sāratthappakāsinī, Vol. II, p. 312) と注釈している。むろん死後の存在が問題とされる tathāgata は、有情の意に解されるわけであるが、こうした注釈者の意図はどこにあったのだろうか。

パーリ仏典中において、tathāgata を有情の意に解する箇所も存在しないわけではない。

執着を超え、執着することなく、慢心にとらわれている者の中にあって (mānasattesu) 慢心することなく (amānasatto)、苦しみをその原因と共によく知っている tathāgata は、献菓を受けるにふさわしい (Sutta-nipāta 473)

しかしながら、文脈から tathāgata は証悟者、解脱者を意味することは言うまでもない。したがって、この tathāgata はもちろん一般の有情を指しはしないが、有情なる存在としての証悟者を意味すると解釈できよう。この点を考慮すれば、サンジャヤ説等で死後の存在の有無が問われる定型句の

tathāgata は、証悟者といえども有情なる存在である以上死は免れないが、一般有情とは異なる解脱者が、その死後どうなるのかということが問われていると言えよう。

また、Dīgha-nikāya 第一経の『梵網経(Brahmajāla-sutta)』で紹介する四種の詭弁論（vācā-vikkhepa）のうち第四番目の思想は、『沙門果経』におけるサンジャヤ説と全同である。六十二見では、全体を通じて我(attan)の問題が、世界(loka)と共に思索の対象となっているが、サンジャヤ説と考えられる詭弁論の箇所では、全く我を示す語が見当たらない。六師の一人として、当時かなりの勢力を有したであろうサンジャヤが、思想界の中心課題である我の問題について論じなかったとは到底考えられない。サンジャヤ説の tathāgata の死後存在の問題は、証悟者といえども肉体は死と共に消滅するが、解脱した者の場合その輪廻の主体たる我は死後どうなるのかという問いに置き換えられるのではないだろうか。そう考えることによって、ブッダゴーサ等の tathāgata=satta, attan の解釈も首肯できよう。この点は、既に指摘されている、ジャイナ教文献の Viyāhapannatti 17-2 において tahāgaya が jīva を形容し、一種の解脱した霊魂の状態を示すとする用例[7]とも矛盾しない。

サンジャヤ説等に見られる死後存在を問題とする定型句の tathāgata の意味を、証悟者あるいは有情（我）のどちらかに限定する必要はなかろう。それは有情一般を示すのではないが、有情なる存在としての証悟者を意味し、根底に輪廻の主体たる我の存在に関する問いが包含されていると考えられる。

1　Hoti tathāgato ti ādisu satto tathāgato ti adhippeto. (Sumaṅgala-vilāsinī, Vol. I, p. 118); Tathāgato paramaraṇa ti, ettha Tathāgato ti, attā. (Udānaṭṭhakathā, p. 340) etc.

2　渡辺研二「サンジャヤ説の tathāgata- 再考—ジャイナ教文献からみた『沙門果経』の六師（二）—」（『大正大学総合仏教研究所年報』4　一九八二）等

3　samaṇa-brāhmaṇā sammaggatā sammā-paṭippannā ye imañ ca lokaṃ parañ ca lokaṃ sayaṃ abhiññā sacchikatvā pavedenti (Dīgha-nikāya, Vol. I, p. 55)

4　Āyāraṅga 1-3-3; Sūyagaḍaṅga 1-13-2, 1-15-20 etc.

5　渡辺研二「ジャイナ教文献における tathāgata-（一）」（『印度学仏教学研究』27—2　一九七九）参照

6　Dīgha-nikāya 第二十九経『清浄経（Pāsādika-sutta）』においても文脈上 tathāgata は証悟者の意味に解せる。

7　渡辺氏前掲論文参照

〈キーワード〉　サンジャヤ、tathāgata、如来、有情、我

（大谷大学大学院）